

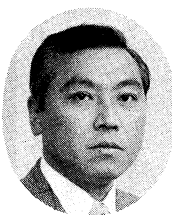
一年ぶりに、実物との対面であった。

中世板碑の有り様は、関東地方鎌倉時代にものが顕著であるが、時代が下るにつれて普及し、本県でも数多く確認されている。また、必ずしも支配階級あるいは僧侶による造立ばかりではなく、この碑のように素朴で庶民のならかの供養や願いを反影したであろうことを思わせるものも多い。

おもうに、このような出会いは、歴

新任地で思う

矢部 征男



(県立川俣高等学校教諭)

史の長い歲月と、これに関わってきたたくさんの人々を介さずにはあり得ない。また、Oさんのような地道な研究家の案内がなくてははたせなかつたろう。折しも八月。終戦より四十二年の平和な年月が流れた。われわれの現代史が、やがてどの様に記録されるのか、想いを馳せながら山を後にした。

て峠の思い出を語ってくれる。

峠をくだると、山あいを流れる伊南川の兩岸には水田が開け、河岸段丘上にはいくつもの集落が点々と連なっている。どっしりと大きなカヤぶき屋根の曲り屋はなお一層の静けさと落ち着きを感じさせてくれる。

「先生、トマト好きかや」といってもぎたてのを持ってきてくれる生徒、

「先生、魚食べてけやれ」と獲ったばかりのアユをビニール袋に入れ差し出す生徒、ここには、かつて体験したことのない自然と、その自然にはぐくまれた優しさに満ちた人の心があつた。そんな心に安らぎを感じるのには年齢の

せいなのだろうか、それとも懐古趣味なのだろうか。

それにしてもこのような生徒たちには自分は一体何をしたらよいのか。どんなことをしなければならぬのか。知識や技術を身につけさせることか。これからの時代を創造し、適応して生きる力を与えることか。これらも大切なことであろう。しかし、忘れてはいけないこともある。吹雪で動けなくなつた人を救いに降り積もる雪をかきわけてかけた村人もあつた。病人を励ましながら幾人もして夜道の峠を急いだこともあつたにちがいない。重い荷を背に黙々と峠を登る行列も何度となくみることができたであろう。そこには自分とともに生きる他人があり、他人とともに生活する自分があつた。厳しい自然なればこそ人々が強めた結びつきがあつた。無言のうちに助け合い、励まし合う「愛」があつた。

『時として科学の力は人間を不幸にする』とは、かつて駒止峠で不慮の死を遂げられた人に対する追悼のことばである。静かに流れる伊南川、泰然と構える山々に囲まれて生活してみるとこのことばがなお一層重みを増して記憶されてくる。自然を師とし、自然を媒介として培われた人々の心と生活は深く積もる雪の如く簡単には消えることとはないだろうが、いつまでも失いたくない大切なもののように思われる。

「不惑」ということばとは反対に、大いに迷い、自分の使命について深く

考えさせられる新任地となつた。

(県立南会津高等学校教諭)

「先生、本当はね」

尾平 孝次



「先生、本当はね——」

まつ黒に日焼けした顔で、いたづらっぽく笑いながらS君は言つた。あれは何年前の夏の日だつたであろうか。郡の水泳大会のあとだつた。四年生からがんぼつてきたが、身体に障害をもつ彼は、とうとうメダルを手にする事ができなかった。小学校最後の夏だつた。

「先生、本当はね。プールの中で必死に泳いでいると、応援の声をなんてちつとも聞こえないんだよ。先生、知らなかつたでしょ。」

でも、不思議なんだよなあ。苦しめてたまらなくなると、聞こえるはずのない先生の声が、ちゃんと聞こえてくるんだよなあ。